

## 平成 29 年度霞ヶ浦学講座第 6 講「古墳時代の霞ヶ浦を考える」見学バスツアー実施報告

日時：平成 29 年 8 月 20 日（日）9：30～16：00

見学地：舟塚山古墳と府中愛宕山古墳（石岡市），三味塚古墳（行方市），大生古墳群（潮来市），富士見塚古墳（かすみがうら市）

講師：沼澤篤（霞ヶ浦環境科学センター） 参加者：37 名

要旨：日本の古墳は仁徳天皇陵をはじめ，世界遺産に推されるようになり，あらためて注目されています。古墳時代は 3 世紀後半から 7 世紀頃まで約 400 年間続きました。弥生時代は紀元前 4 世紀（最近の説では紀元前 10 世紀）から 3 世紀頃までの約 700 年間（最近の説では約 1300 年間）です。古墳時代の後は飛鳥時代で，蘇我氏，物部氏等の台頭，聖徳太子の活躍，大陸や朝鮮半島との交流，仏教伝来，乙巳の変，天皇制と大和朝廷の確立を経て，日本国家の原型が形を整えていきます。古墳時代は記紀に描かれた神話の時代にあたり，口承によって事績が伝えられました。

初期の古墳は既に弥生時代後期に築造されています。前方後円墳は日本独特の墳形で，箸墓古墳（奈良県桜井市，全長 280m，西暦 250 年前後に築造）が最初といわれています。箸墓古墳の被葬者は「ヤマトトイモモソヒメ」（宮内庁）で，邪馬台国の女王卑弥呼の墳墓である可能性が大きいことが近年指摘されています。大型前方後円墳は古墳時代最盛期には畿内，西日本だけでなく，霞ヶ浦周辺をふくむ東日本でも数多く築造されました。このことからヤマト王権の強い影響力が東日本にも及んだことが推定されます。

大型前方後円墳が霞ヶ浦沿岸各地に築造された意味はどこにあるのでしょうか。今回の見学ツアーでは，そこに焦点を当てて考えてみました。当時霞ヶ浦はまだ内海でしたが，谷津田から続く沿岸湿地は稲作に適しており，新田開発によって次第に生産力が上がり，貯蔵米によって，冬期の余剰労働力を古墳築造に動員できたと思われれます。もちろん，地方ごとに豪族または国造（ヤマト王権から任命または派遣された権力者）と呼ばれる指導者層が余剰生産力を背景に現れ，ムラの連帯感の醸成による秩序の維持，水路や水田開発など稲作の先端技術，鉄器の製造技術の伝授，さらにヤマト王権の意向の伝達などに権勢を振るったと想像されます。また時には，近隣のムラとの戦さにおいて統率力を発揮し，団結の象徴としてムラ人の尊敬を集めたかもしれません。その指導者が亡くなった時，あるいは亡くなる前に大きな墳墓を築造し，厳粛に葬送の儀式を執行することで，そのムラ（地域）の団結力と一体感を誇示することになったのではないのでしょうか。さらにヤマト王権への恭順を再確認することになったのかもしれません。東国開発の祭神としての鹿島神宮との関係も深かったのではないかと想像されます。

このような想定は，古墳の大きさ，墳形，出土した副葬品などを検討すると，荒唐無稽ではないと思えてきます。出土した副葬品のうち，三味塚古墳の馬型飾付金銅冠からは大陸や朝鮮半島との関係が，各古墳から出土した様々な埴輪からは，当時の人々の自然観，世界観，死生観が偲ばれ，興味つきないものです。

石岡市の舟塚山古墳は関東地方で第二の大きさを誇り、当時の国造の筑紫刀禰（つくしとね）の墳墓ではないかと推定されています。行方市の三昧塚古墳は鎌田川の低湿地に築造されたことが特徴です。さらに被葬者の人骨とともに、権力者の象徴たる武具、華麗な装飾品等が発掘されて話題になりました。潮来市の大生古墳群は鹿島神宮の創建時に畿内から移住した人々の奥津城ではないかと推定されています。かすみがうら市の富士見塚古墳の被葬者は特定されていませんが、出土した多様な埴輪から当時の人々の生活が想像されます。

古墳時代には大型船（他県では船の形象埴輪が出土）が作られ、既に大陸や朝鮮半島との交流（時には兵士の派遣）が盛んに行われていたようです。当時内海だった霞ヶ浦でも、大型古墳を築造するほどの豊かな生産力を持つミラの人々は、舟によって近隣のムラと物資の交換などで盛んに交流したと思われます。しかし木造船は腐りやすく、霞ヶ浦周辺では古墳時代の舟の出土例はありません。同様に、古墳時代には大陸から伝来した漢字が一部の権力者を中心に使われていましたが、木簡、竹簡に記されたため腐朽し、残っていません。しかし、埼玉県行田市の「さきたま古墳群」の稲荷山古墳から出土した「金錯銘鉄剣」には、被葬者がワカタケルノオオキミ（雄略天皇）の警護隊長を務めた人物であることが金の象嵌で鮮やかに記されており、すでに文字が使われていたことを示す大発見でした。



富士見塚古墳（かすみがうら市）を見学する受講者